

## ◇論文目次◇

### 論文-----

システム監査の現状と普及への道	丸山 満彦
情報システム部門の悩みとシステム監査への期待	篠崎 良介
システム監査人と人間力	中谷 正明
経営に役立つシステム監査考	佐竹 博利
システム監査とともに歩んで	片岡 学
J-SOX内部統制監査に必要な専門能力について	後藤 知久
ITに関わる内部統制の状況とシステム監査人及び公認会計士の責任	中村 謙一
財務報告に係る内部統制の重要な欠陥とその改善策	石島 隆
法的セキュリティのシステム監査	松田 貴典
情報システムのライフサイクル別システム監査について	岡谷 亨
システム監査の効果の可視化の必要性	吉田 博一
IT部門のプレゼンス向上とシステム監査	浦上 豊蔵
プロジェクト監査とシステム監査・雑考	土出 克夫
IT社会の信頼確立におけるIT監査の役割	飛田 治則

### エッセイ-----

システム監査の興隆	木村 安寿
システム監査技術者とシステム監査人協会の思い出	田淵 正信
衝撃をうけたアメリカの20年前のシステム監査	安本 哲之助
システム監査との出会い	土出 克夫
劇団Z	馬場 孝悦
システム監査と2つの”わくわく”	日高 祐子
システム監査サービスとは	
近畿支部のあゆみ	
第六代(?)近畿会支部長として	吉田 博一
協会の改革についての提案	石島 隆
デジタル時代を生きる 電子メール川柳集 抜粋	

### コラム-----

付喪神、鶴	神尾 博
一口コラム	藤野 正純

## ◇解題◇

### おことわり

この20周年記念誌に掲載した論文、小論文、エッセイには、寄稿文の表題の次に執筆者のお名前の他に資格や所属あるいは肩書を表示している場合がありますが、これは、論文等の内容が所属される会社等の意見を代表されていることを示すものではなく、どの論文等も、それぞれの執筆者個人の見解であります。まずはじめに、誤解のないようお断りしておきます。

### この記念誌の構成

この20周年記念誌は、「システム監査人をどう活用するか？」という20周年記念シンポジウムの統一テーマに沿って、システム監査に対する様々な立場や視点をもった方達に寄稿をお願いし、あるいは近畿支部の会員に公募して集まった論文、小論文、エッセイから成り立っています。そして、各論文は、ある緩やかな問題意識のもとに並べています。

システム監査とはどんな役割をもっているのか、役に立つのか、役に立っていないとしたら何故なのか、システム監査が普及しきれない理由は何なのか、阻害原因は監査を依頼する側にあるのか、監査を実施する側にあるのか、あるいは監査を利用する側にあるのか。どのような局面でシステム監査は導入したらよいのか、成功事例はあるのか、などなど。

まず、はじめに並べましたのは、今回のシンポジウムのパネラーとモデレータの方達の論文です。パネルディスカッションでの持説を紹介される時間に代えて、予め文章で自説を展開してもらったものです。モデレータは、パネルディスカッションでは自己の意見を表明することはありませんが、どういう考えをもった方か知ってもらうためにエッセイを寄稿してもらいました。

篠崎良介氏は、企業の情報システム部に長く在籍している立場をストレートに出して、システム監査は情報システムの効率性にもっと力を注ぎ、会社の経営者が期待する情報システムの評価と改善助言を行うよう提言しています。

丸山満彦氏は、システム監査の現状を分析した上で、経営者がシステム監査を意識しなければならない状況になっている今こそ、システム監査体制を確保し、システム監査人の質の確保し、外部の専門家の活用を考えねばならないと提言しています。

パネラーのあとのお二方は、基調講演で詳しくお話しされますので、その主張は、講演のプレゼン資料をご覧ください。

佐竹博利氏は、経営者が求める「経営に役立つ」システム監査に、鋭い疑問を呈しています。経営者自身の責任である意思決定の結果を評価するようなことをシステム監査に求

めるのはいかなものかと。J-SOX が導入されることになってから、内部統制と意思決定との区分に混乱が生じています。

片岡学氏は、長年、監査人としてシステム監査に関わってきた経験を振り返り、J-SOX 対応を機に見直されている IT 統制が、組織内における IT 統制にかかる文化を変革しない限りは、一過性のブームに終わってしまわないかと疑っています。

IT に関わる内部統制については、次の三点の論文が役に立つでしょう。

後藤知久氏は、システム監査人が内部統制監査に参加するための要件を明確にしようと論を起こしています。その中で、システム監査人の要件や、システム監査と内部統制監査の異同等基本的な概念の整理をしていますので、知識を整理されたい方には最適です。

順番が前後しましたが、中谷正明氏の「システム監査人と人間力」は、システム監査基準からだけでは窺い知れないシステム監査人の要件を論してくれます。

中村謙一氏の論考も、佐竹氏のそれと同じように深い溝として横たわっている問題を提示しています。IT の分かる人と分からない人、監査の分かる人と分からない人、この間を埋めるために、システム監査人は、何を努力しないといけないのか考えさせられます。

内部統制監査に関する三つ目の論文は、石島隆氏の実証研究です。内部統制の欠陥事例と対応策を調査した結果から、内部統制改善のヒントを得ることが出来るでしょう。また、石島氏は、ここで、業務監査とシステム監査を一体化した監査を提案しています。

ここからは、システム監査を活用するためにはどのようにしたらよいか、どのような監査をすればいいのか考察した論文が続きます。

松田貴典氏は、事業者の法的脆弱性を前提としたシステム監査は、企業等のコンプライアンスの問題にとどまらず、企業の持続的経営が求められるガバナンスの問題でもあるので、情報の法的セキュリティに対するシステム監査が今後ますます重要になると提言しています。

岡谷享氏は、企画、開発、保守・運用という情報システムのライフサイクル別にシステム監査を活かした経験を例示しています。この中でシステム監査とコンサルティング等との異同も論じています。

土出克夫氏は、自身が導入・普及に関わったプロジェクト監査について詳説しています。プロジェクト監査にシステム監査を組み合わせることで、より高度な監査が可能となると説明しています。

吉田博一氏は、システム監査の導入によりトラブル件数が減っているといった仮説を、効果の可視化により証明しようと主張しています。

浦上豊蔵氏は、企業における IT 部門のプレゼンスを向上して、ビジネスに貢献できる IT 部門として存在を認められるようにシステム監査を実施することが重要であると、期待

しています。

最後に、飛田治則氏は、システム監査をネットワークを前提としたより広い世界の中で、より広い概念としての IT 監査としてとらえることを提案しています。サプライチェーンでは、組織境界の不明瞭化によって IT ガバナンスの実現が困難になりますが、一方でサプライチェーンというつながりの中で IT 監査を促進することが可能であることを明らかにしています。

ここに、システム監査が歩むべき壮大な未来図が見えてきたのではないのでしょうか。

監査は、マイケル・パワーが「監査の爆発的拡張」と言い表したように、監査される側、監査する側、監査を利用する側それぞれの立場により様々に解釈される本質をもっています。コラムにあるように、正に「鶴」的存在です。これからも、システム監査に付き合っていくためには、監査のもつ鶴的存在に振り回されるのではなく、懐の大きな見識でもって、様々な立場の人達による予測しなかった発想を吸収して、自らの考えを養っていくことが大切なのかもしれません。

なお、エッセイについては、近畿支部の歴代の会長・支部長や昔のことを知っている会員に、この 20 年を振り返ってもらいました。システム監査への出会いは様々です。その出会いが今のその人にとって、どのような基盤となっているのか、いろんな思いを書いてもらいました。近畿支部という組織の運営についての辛口の意見もあります。

過去の近畿支部らしさが出たイベントとして、実践セミナー「劇団 Z」と 10 周年の時に発行した「電子メール川柳集」をとりあげています。

## 編集後記

この20周年記念誌は、日本システム監査人協会近畿支部で20周年記念事業を開催するに当たって、「システム監査人をどう活用するか」という統一テーマで講演とシンポジウムを、この時期にこれ以上ないと思われる講師陣およびパネラー陣で行うことが出来たからこそ生まれたものである。

逆説的ではあるが、最高の講師陣による思索的な講演、オフレコで議論される刺激的なパネルディスカッションを聞けるという確信が得られたときに、その意見を聞く機会を設けられなかった多くの近畿支部会員の意見や考えを集めて、このシンポジウムをより重層的に意義あるものとして残したいと思ったのである。

短期間で論文集をまとめることに懐疑的な声はなくはなかったが、私はしごく楽観的であった。記念誌の編集を進めるにしたがって、その楽観に根拠があったことに気付かされた。寄稿を依頼した支部会員のみなさんが普段から温めていた問題意識が、急な依頼にもかかわらず、短い時間でその思いを文章にすることが出来たのだということ。

周年記念事業というのは、得てしてお祭りで終わってしまうものであるが、システム監査にとっての20年は、決して軽い20年ではなかったと思うと、これを単なるお祭りとして終わらせることは出来なかった。この20年で、システム監査の世界を探求し支える人たちに世代交代の波が押し寄せている。探求すべきテーマにも新しい課題が生まれている。システム監査黎明期に活躍した先人達の功績がいま尊敬の念で見直されるものもある。未だに古くて新しいテーマとして繰り返し議論されているテーマもある。また、同じ今の時代に生きていても、その立場や経歴や思索の違いによって、システム監査に対する会員それぞれの思いも様々である。

20周年という区切りを契機として、システム監査に関わるある意味混沌とした様々な思いや意見をここに集めてみられればと思い編集した。中には、過去に活躍されたのに、ここで意見を述べないことを選択した方が複数人あったが、多くの方は、この趣旨を理解されて短期間にも拘わらず、とても貴重な傾聴に値する思いや意見を文章にまとめていただいた。心から感謝の意を表すものである。そして、何よりも、この千差万別な知見を多くの読者に提供できることを喜ぶものである。

是非、このシステム監査の広い海原を楽しんでほしい。システム監査の思索にどっぷりと浸ってほしいと思う。

20周年記念誌編集委員 藤野正純 飛田治則  
廣瀬克之 大塚一志  
小宮弘信